堤 未果
Mika Tsutsumi

㈱貧困大国アメリカ

岩波新書
1430

目　次

プロローグ……1

第1章　株式会社奴隷農場……19

夢の退職生活のはずが……／デットトラップ（借金の罠）／「もっとたくさん、もっと効率よく」／独占禁止法解禁でよみがえる悪夢／骨抜きの食品安全審査／復活した農奴制／もう一つの波――遺伝子組み換え作物／「この実験結果は爆弾だ」／学会に入り込むバイオ企業関係者／「GM食品」と「原発」に共通する安全神話／つぶされる住民投票／合言葉は「言わざる・聞かざる」

第2章　巨大な食品ピラミッド……65
垂直統合ブームがやってくる／食品業界とウォール街の最強タッグ／業界関係者だらけのFDA／食の工業化で潤う抗生物質市場／企業は「オーガニック食品」という夢を売る／つぶされる小規模有機農家／ぎゅう詰め飼育のオーガニックチキン／「これはSFではない、現実だ」——GMサーモン／GM種子を野放しにする〈モンサント保護法〉の成立／食品安全近代化法——FDAが外国の「食政策」を管理する

第3章　GM種子で世界を支配する……121
自由化で消える中小農家／企業参入で無国籍化する農業／多国籍企業の夢の地——イラク／命令81号／「白い金塊」で綿の生産量が五倍に！——インド／インドとアメリカの「1%」が手を結ぶ／輸出用GM農地と化したアルゼンチン／被災地復興をGM種子で支援——ハイチ／アメリカは最強の外交武器を手に入れた／

他国の食を支配するNAFTA・FTA・TPP／EUのGM規制はまだ崩せる

第4章　切り売りされる公共サービス……167

「ようこそ、全米一危険な町へ！」／全米の自治体の九割は、五年以内に破綻する／増えるのは低賃金サービス業ばかり／公教育を全面解体／消防署、警察、公園が消えてゆく／雇用を戻す魔法の杖――〈労働権法〉／デトロイトが非常事態宣言／民営化された夢の町

第5章　「政治とマスコミも買ってしまえ」……205

企業が立法府を買う／強大な力で州法を動かすALEC／企業のためのモデル法案／「これは子どものためではなく、教育ビジネスのための法案だ」／「移民排斥法」で花開く刑務所産業／ついに

企業の政治献金が無制限に／世界中の富裕層がアメリカの政策に介入できる／選挙とは、効率の良い投資である／一四八万本のCM広告費で笑いが止まらないTV局／献金元をたどれば、当選後の政策がわかる／ティーパーティの陰のスポンサー／過激な人物が真の問題から目をそらさせる／寡占化するマスコミとソフトニュース／なぜ大統領公開討論会に第三党は出ないのか／企業が市民運動を利用する

エピローグ――グローバル企業から主権を取り戻す……255

企業はモラルより損得で動かせ／大手銀行に対し預金者の力を使う／「1%」より、それを支えるシステムを攻撃せよ」

あとがき……271

・本文中の肩書きは取材当時のものである。なお、仮名を用いたケースがある。
・一ドル＝一〇〇円で換算した。
・本文中の写真で特に断りのないものは、著者が撮影した。

プロローグ

ニューヨーク州ブロンクスに住むミシェル・バトラーは、月末の夜中一時になると、割引クーポンを手に、地下鉄駅のそばにある大型、安売りスーパーに向かう。店に入り、色とりどりの野菜や果物が並べられている脇を足早に通り抜け、向かう先は最安値コーナーだ。一ドル四八セントの食パン一斤と袋入りラーメン、レンジで温めるインスタント米をカートに入れる。コーンスナックは割安な三倍サイズ、仕事で忙しい朝はまとめ買いする缶詰のスープが役立ってくれる。朝食用シリアルとコカ・コーラの二リットルボトルを一本。いっぱいになったカートを押してレジに行くと、ミシェルはハンドバッグからプラスチックのカードを取り出した。

支払額はしめて五六ドル四五セント。

ミシェルは安堵のため息をついた。

「SNAP（スナップ）(Supplemental Nutrition Assistance Program＝補助的栄養支援プログラム)の上

限は週二九ドルです。これで二週間は大丈夫。本当にこの制度には感謝しています。二〇一二年の一月に会社をリストラされて以来ずっと失業中ですが、安い食品でうまくやりくりすれば何とかやっていかれます」

ＳＮＡＰとはアメリカ政府が低所得層や高齢者、障害者や失業者などに提供する食料支援プログラムだ。以前は「フードスタンプ」と呼ばれていたが、二〇〇八年一〇月にＳＮＡＰと名称を変えている。クレジットカードのような形のカードをＳＮＡＰ提携店のレジで専用機械に通すと、その分が政府から支払われるしくみだ。

受給額は州や受給者の収入によって異なるが、ニューヨーク州では、単身者で月収一一八〇ドル（約一一万八〇〇〇円）以下なら月一一七ドル（約一万一七〇〇円）分支給される。全米の平均支給月額は一三二ドル（約一万三二〇〇円）、カードは全国二三万一〇〇〇店舗で使用できる。が、嗜好品は買えず、あくまでも食品のみという条件付きだ。

ＳＮＡＰは月に一度、夜中〇時に支給されるため、毎月その日は夜中過ぎから全米各地の安売りスーパーに受給者があふれるという。

ミシェルの買い物袋も、加工食品や炭酸飲料、缶詰やインスタント食品でいっぱいだった。

「生鮮食品は単価が高いので、いつも最安値の食品コーナーに行きます。ＳＮＡＰはありが

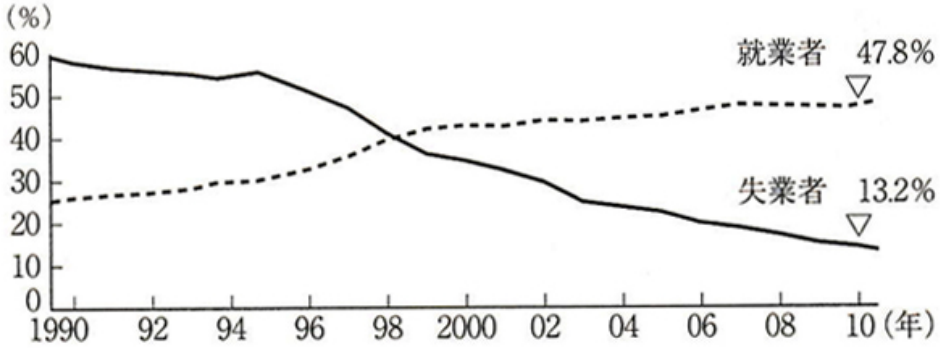
たい制度ですが、一食分一ドル三〇セント(約一三〇円)ですから贅沢はできません。私と同時期にリストラされた同僚には息子が二人いるのですが、安くてすぐ満腹になるインスタント食品中心でも、毎月二週間で冷蔵庫が空になると言っていました。彼女は次の支給日まで、教会の炊き出しやNPO(特定非営利団体)の食料配給の列に並んでいますね」

アメリカの貧困率と失業者の数は、リーマンショック以来増え続けている。

四人家族で年収二万三三一四ドル(約二三〇万円)という、国の定める貧困ライン以下で暮らす国民は現在四六〇〇万人、うち一六〇〇万人が子どもだ。失業率は九・六%(二〇一〇年)だが、職探しをあきらめた潜在的失業者も加算すると実質二〇%という驚異的な数字になる。一六歳から二九歳までの若者の失業率を見ると、二〇〇〇年の三三%から四五%に上昇、経済的に自立できず親と同居している若者は六〇〇万人だ。

スーパーには加工食品があふれている

ミシェルのようなSNAP受給者は年々増加、二〇一二年八月三一日のUSDA(農務省)発表では、約四六六七万三七三人と過去最高に達した。一九七〇年には国民の五〇人に一人だったのが、今では七人に一人がSNAPに依存していることになる。



受給者は失業者より就業者が多い(子どものいるSNAP受給世帯の内訳)(アメリカ農務省データ)

「問題は、仕事の空き自体が少ないことよりも、まともに暮らせる賃金の仕事が見つからないことなんです」

ミシェルはかつて中小企業の秘書だった。だがリーマンショックのあおりを受けて会社が倒産してからは、昼間はウェイトレス、夜はバーテンダーのアルバイトで食いつないでいる。

国内の貧困状況を調査する市民団体「ワーキングプア・ファミリー・プロジェクト」のデータによると、二〇一〇年の時点でアメリカ国内のワーキングプア人口は一億五〇〇〇万人(二人に一人)を突破、うち四人に一人が、八大低賃金サービス業(ウェイター・ウェイトレス、レジ係、小売店の店員、メイド、運転手、調理人、用務員、介護士)に就いており、給料の手取り額が貧困ライン以下だという。

ミシェルがSNAPを申請したのは、二〇一二年の一一月だった。それまでSNAPの存在は知っていたものの、アルバイトをしながらも受給できることは知らなかったという。

「底辺の人がもらうイメージだったので、わざわざ調べようともしなかったのです」

だがある日、職探しの帰りにふと耳にした一本のラジオCMが、彼女の運命を変えることになる。

それは女性二人の会話だった。

「ねえ、彼女最近生き生きしてない？　肌つやもいいし、何か特別なことをやってるのかしら？」

するともう一人の女性の声が答える。

「私、彼女の秘密を知ってるわ。SNAPよ。SNAPで栄養のあるものをしっかり食べるようになってから、彼女すっかり元気になったわ」

「SNAPですって？　でも私のような、少ないけど収入がある高齢者でも受けられるのかしら？」

「もちろんよ！　実は私も給料が少ないから、SNAPに申し込んだの。毎月給料が医療費や家賃の支払いで消えちゃうけど、子どもたちにまともな食事を食べさせられるようになってホッとしたわ！　SNAPは申請も簡単だし、絶対におすすめよ！」

ＣＭの内容は本当だった。半信半疑でミシェルが最後に流れた電話番号にかけると、電話の向こうのインド訛りの女性は丁寧に申請方法を教えてくれた。住んでいる町の社会保障事務所で手続きをしたところ、その場で承認され、二週間後にはカードが送られてきたという。

「受給してからわかったんですが、今国中ＳＮＡＰの広告だらけですよ。テレビやラジオではＳＮＡＰのＣＭがしょっちゅう流れているし、新聞を広げるとまず目に飛び込んでくるのはＳＮＡＰの広告ですね。ネットで何かを検索しようとしてもＳＮＡＰのバナーが出てくるし、学校やバス停、スーパーのウインドウにもＳＮＡＰのポスターが貼られています。ＵＳＤＡがかなりの予算を使って宣伝しているみたいですよ」

それは奇妙な話だった。

一六兆ドル（約一六〇〇兆円）という借金を抱えたアメリカは、リーマンショック以降何度も、国家破綻危機に直面している。二〇一三年三月にはバラク・オバマ大統領がついに強制歳出削減案に署名、高齢者の医療保障や貧困層支援などを始め、向こう一〇年で三兆九四億ドルの歳出削減が予定されている。